

【パキスタン洪水救援活動に参加して】

12 階A病棟看護師 河合結子

2010 年 7 月下旬、パキスタン・イスラム共和国ではモンスーンによる影響で集中豪雨が続き、洪水により 2,100 万人が被災しました。日本赤十字社は、各国赤十字社と共同で緊急支援活動を行いました。

私は 8 月 19 日から 9 月 15 日までの約 4 週間、ノルウェー赤十字社の巡回診療チームの一員として参加しました。避難民キャンプや学校を巡回し、毎日 200 人程の患者さんの治療にあたりました。疾患の多くは、下痢や脱水、呼吸器疾患、眼・耳鼻科系疾患、疥癬などの皮膚疾患で、私は受付で患者さんの観察をしたり、医師の診療補助、創傷処置、服薬指導などを行いました。また妊産婦さんへの授乳指導や、乳幼児健診の補助なども行いました。活動中、気温は 40 度を超える猛暑で、断食などの影響も重なり、被災者は過酷な環境を強いられていました。中には、かなり衰弱した子どもがおり、救急車や我々の車両で近くの病院に搬送しました。避難所では、安全な飲料水やトイレなどが整備されておらず、衛生状態の悪化が懸念されていました。現地で知り合った微生物学の医師から「パキスタンでは、緑茶で手洗いすると下痢の罹患率が下がるという研究結果がある」というアイデアをもらい、住民の前で緑茶を用いた手洗いのデモンストレーションを行うなど、地域での衛生活動も行いました。緑茶の抗菌作用は日本でも以前から言われており、パキстанは紅茶(チャイ)が一般的ではありますが、お茶の文化ということで共通点を感じたりもしました。

活動の鍵となる人材に関しては、女性スタッフが少なく、毎日ぎりぎりの人数で行っていました。そのためか、チームの結束力は高まりました。時折、患者さんから「食べ物がほしい」と言われ、避難民たちに十分な食糧と飲料水が行き届いていない状況を目の当たりにし、救援活動における調整の難しさを痛感しました。活動地域では洪水被害も収まりつつあり、今後は円滑な復興支援が進み、人々が早く元通りの生活に戻れることを願っています。現地での治安の悪化はなく、体調も崩すことなく活動ができたことは幸いでした。また多くの人との出会いや新たな活動経験ができ、濃密な時間を過ごすことができました。

最後に、この災害に多くの救援金を寄せていただいた全ての方々に、心より感謝申し上げます。



地域住民に対し、緑茶を使った手洗いのデモを行う河合看護師

(IFRC)